

「ストーブの周りには家族の風景があった」とはある雑誌のキャッチコピーだが、言い得て妙である。薪ストーブや石炭ストーブの時代には、居間の中心にそれらが置かれ、そのストーブの周りに家族が何時しか集まり、団欒があった。古き良き時代の家族の風景だ。

さて、北海道の歴史はある意味では寒さとの戦いの歴史である。日本初のストーブが製作されたのは、安政年間である。安政 3 年(1856)、函館奉行所の役人梨本弥五郎なる者が、宗谷に赴任を命ぜられた。任地の寒さに不安を覚えた彼は、かつて英国船で見た事のある煙突付きのクワ（へ）ヒル(オランダ語でロストル付きの石炭ストーブ)なる暖房設備を職人に命じて注文したが、失敗続きであったので、業を煮やした彼は宗谷で腕の立つ景蔵なるアイヌの鍛冶屋に注文したところ、見事に成功し、これが国産初のストーブになったのである。宗谷がストーブ国産・発祥の地となった次第である。



(ヌカストーブ:岩崎曹長持参)

人類は、火をコントロール出来るようになって、人間になったとも言われる位、火をコントロールすることは大事業であった。当初は、「焚き火」であり、次いで囲炉裏も登場した。屋内での問題は排煙であり、その解決策として煙突が発明され、暖炉などが実用化された。住居自体が煙突の効果を発揮するような構造のものもあるようだ。

雷の正体が電気であることを発見した彼の有名なベンジャミン・フランクリン(1706~1790)が考案した箱型のベンジャミンストーブが、現在のストーブの原型である。

ストーブも燃やす燃料によって、色々と区分される。「薪」であり、「石炭」や「コークス」であり、「石油」であり、最近では燃やすものではないが「電気」ストーブである。

今は既に使用されていないようだが、ヌカを燃やす形式のヌカストーブもある地域では使用されていたようだ。どの様なものか興味津々なのだが、不明だ。ヌカは一挙に燃えることなくじわりと緩慢な燃え方をするようだ。燃料としては適しているのだろう。また、リサイクル品であり経済的でもあり、入手もさして困難ではない。ヌカを所謂米糠と思っていたが、さにあらず、大鋸屑のことである。方言でヌカというのだそうだ。

形状としては石炭ストーブのズンドウ、ダルマ、ルンペン等のストーブがある。ズンドウは鋳物製の石炭投げ込み式のもので、煮炊きに便利だったようだ。ズンドウ即ち寸胴で、寸単位の胴回りをしていてズンドウと呼ばれた。

ダルマは焼燗の部分が膨らんでいて達磨に似ていることから名づけられた。大型で、広い場所に適し、小学校等に置かれたのは殆んどがダルマでストーブある。

ルンペンストーブは予め石炭を詰め込んでおく型式で、二台を交互に使用した。名前の由来は諸説紛紛であり、浮浪者が石油缶に拾ってきた石炭を入れて焚いていたことがヒント

になったからだとか、2台の内一台が何時も遊んでいるからルンペンの如しとの説等がある。ルンペンと言うのはドイツ語であり、ぼろきれ、廃物、浮浪者の意である。

北海道では明治の初期、開拓使が冬季の暖房用として工業局でストーブを作って普及に努めたが定着に至らなかった。明治30年代には扱いが簡単な薪ストーブが徐々に普及し始めた。本格的な石炭ストーブの定着は、大正末期である。

明治初期には、ストーブの事を「**ヘヤヌクメ**」と言ったという。最近、製品名に余りに一見外国語風なイメージを植え付けるようなイージーなものが多いが、これなどそのはしりか？

貯炭胴に石炭を詰めて燃やす形式のストーブの発明以来急速に普及し始めた。これは座敷にも置けると言うので大変重用され、燃焼効率も良かったので、忽ち広く使われるようになった。

北海道や東北地方など寒冷な地方では、かつてはストーブ列車なるものが運行されていた。JR北海道の観光列車、冬の「釧路湿原号」では昔懐かしい列車ストーブ(ダルマストーブ)を囲み、シバれる釧路湿原を眺めるながら、見知らぬ者同志の話が弾む。昭和の20年代から30年代は北海道の地方線区でよく見られた光景だ。

流氷ノロッコ号でも復活したとの事だが、平成14年2月に乗船した際には確認しておらず、否、見たかも知れぬが、見れども見えずと言うことなのだろう。甚だ残念だ。

(参考：聞き取りや各種のHP etc)